



Title	目をみはる成果 : 快便促進食により大腸がん検診発見率が向上
Author(s)	藤田, 昌英; 阪本, 康夫
Citation	癌と人. 2004, 31, p. 24-26
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/23654">https://hdl.handle.net/11094/23654</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# “目をみはる成果” 快便促進食により大腸がん検診発見率が向上

藤田昌英\*・阪本康夫\*\*

大腸がん検診は鋭敏な免疫便潜血検査法の普及によって、随分と手軽で頼りになる存在になっていますね。しかし、ご存知でしょうか。

検診が確かな成果を上げるには、次の3つの条件を満たしている必要があります。

- 1つは、正しく新鮮な便を採取すること。
- 2つめは、要精検者とわかれば必ず精密検査を受けること。
- 3つめは、良質な精密検査を受けること。

ところで、この条件を満たすことは意外に困難なことなのです。2と3の条件は当然満たされると仮定して、今回は第1の問題—「意外な盲点」とその克服による大腸がん発見率の上昇

—に焦点を絞りお話しします。

## 1. 便秘が誤った診断結果をもたらす

便潜血検査キットの原理は、免疫法で便中にヘモグロビン量が一定量以上あれば陽性と判定します。ところで、大腸がんは胃がんほどには性差のないがんです。しかし、私たちの免疫法での10年間、11万人の大腸がん検診成績では、全国集計と同じで女性の大腸癌の発見率が期待値よりも悪いことが判りました。それも、肛門から遠い深部の盲腸がんや上行結腸がんの発見率が低かったのです<sup>1)</sup>。

そこで、その理由を便秘とにらみ、7万人も

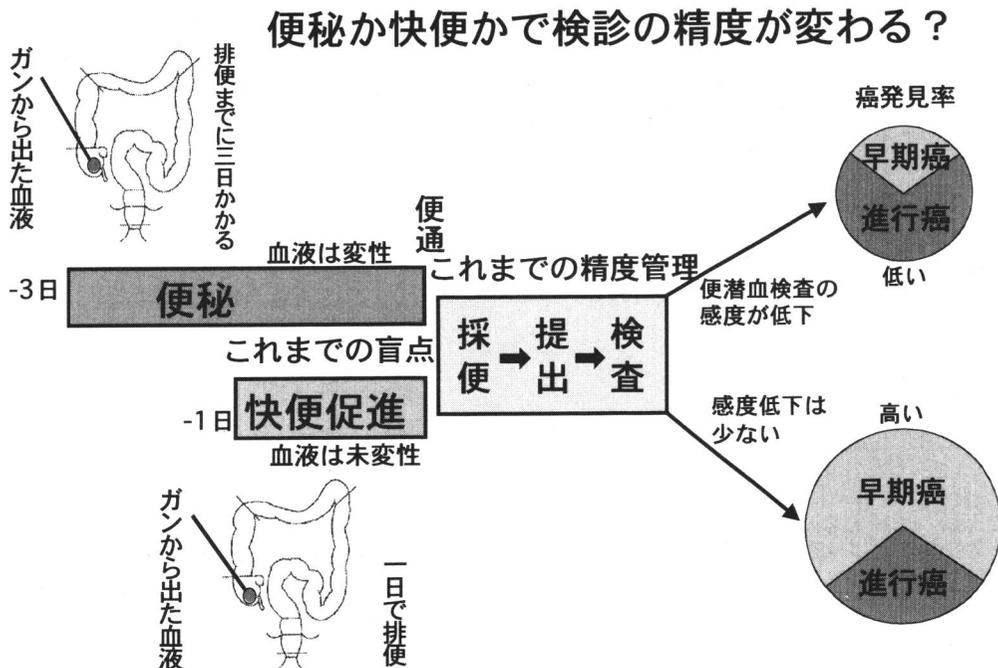


図1

\* (財)大阪癌研究会監事, 阪本胃腸・外科クリニック 大腸がん検診治療研究所所長

\*\* 阪本胃腸・外科クリニック院長

の受診者を問診票から便秘者が否かに分け、大腸がん発見率を調べたところ驚くような成績がわかり、H2000年の本号(27号)の10ページ<sup>2)</sup>と30ページ<sup>3)</sup>に私どもが書いた通りです。

便秘の人の大腸がん発見率は快便の人の半分近くに止まっていました。やはり、便秘の場合、大腸がんから出た血液が腸内の細菌で分解変性し反応しなくなり陰性判定されていたと思われるます。

図1に私どもが考えた仮説—便秘を解消し、快便促進することで検診の精度が向上する?—を示しました。図の中央に示すように、これまでの精度管理は採便→提出→検査についてのみ、温度と湿度の管理が大切と言ってきました。つまり、便通の状態については、これまでの盲点だったのです。

快便促進食により3日に1回だった便秘の人の快便化し、より新鮮な便を調べれば、がんからの血液は未変性の状態で採取され、図の右のように検査感度の低下が少なく、がん発見率の上昇が期待されます。

## 2. 精度向上の決め手、「快便促進食」の開発

診療ではない検診の場で安心して使える快便促進食として、私どもは安全、安価で広く食品界で使われている天然の食物繊維・砂糖大根からとれるビートファイバーとオリゴ糖・ラフィノースの混合顆粒を試作しました。

多くのボランティアに毎食1スティック3Grを3日間食べてもらい、その顆粒服用の受容性を調べた結果、既存の食物繊維製品に比べ良好で、かつ服用によって排便がスムーズになる割合も高いことが判り、[コロノメイト]の名で製品化されました。

## 3. 精度向上の指標 [1] 便潜血陽性率

これまで4年あまりで、すでに2万人近くの人が、この新しく考案した[ネオ・メールチェック・大腸]<sup>®</sup>を受検されました。これは、スティック法より広範囲に便を採取でき精度の高い塗布紙法と、快便促進食「コロノメイト」を

セットにした検査キットで、従来法よりさらに正確な検査結果が期待されるものです<sup>4)</sup>。

その初年度に得られたK町の便潜血陽性率は5.4%で、従来の3市での塗布紙法の成績が6.5%以上だったのに比べ改善の方向が示されました<sup>5)</sup>。

## 4. 精度向上の指標 [2] 従来法で偽陰性だったがんの拾い上げ

この新しい検診法による初年度の受診者2,533名からの発見大腸がんは5名(0.20%)、うち早期が3名と多く見つかりました。さらに注目すべきは、進行がん2名の内容です。

1名は2日とも便潜血強陽性で発見されましたが、前年度は従来法で受診され陰性判定であった偽陰性症例でした。実は、同じS状結腸に憩室症があり本来強い便秘であったため前年は陰性になったのが、快便食で新鮮な便が検査され強陽性判定になったものと解釈される興味深い症例です。

もう1例は1日のみ弱陽性で発見された上行結腸の小さな癌であり、この感度の高い方法だったので捉えられた貴重な症例と思われるます<sup>5)</sup>。この少数例での検討で、すでにこの新しい検診法は快便促進により検診の感度向上とともに、特異度も向上する傾向が窺われ、さらに大集団に適用し評価する価値があると考えられました<sup>5)</sup>。

## 5. 十分な快便促進食により大腸がん発見率が上昇

4年間でまとめた最新の成績のあらましをご紹介します<sup>6)</sup>。この新しい[ネオ・メールチェック・大腸]<sup>®</sup>を受検されたのは、15,847名でした。その詳細はなお分析の途中ですが、ここでは大変に興味深い快便促進食の摂取程度別にみた大腸がん発見率についてお話しします。

食物せんいスティックは検査にあたり、3日間で9本を服用してもらうように計画されています。しかし、実際に何本服用されたかは人によりかなりのバラツキが見られました。そこ

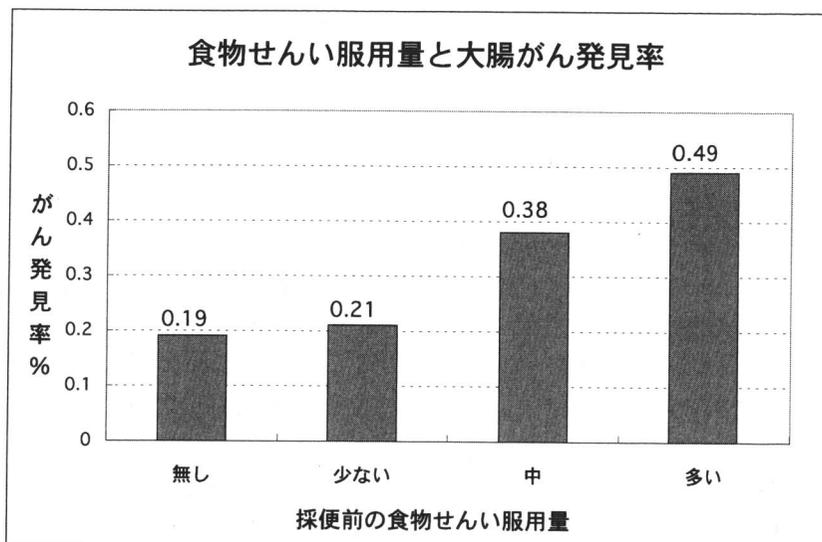


図2

で、便宜上6本以上、3本から6本未満、3本未満の3レベルに大別すると、6,317人、1,829人、7,701人に分かれました。

図2はこの3レベル別に大腸がん発見率を比較したものです。何と服用量が増えるに従って大腸がん発見率の上昇が見られます。快便促進食を多く食べた人からは0.49%と高率にがんが発見されたのに比べ、少なかった人からは0.21%と半数以下しか発見されませんでした。服用無しの人の発見率は0.19%で少なかった人と大差は見られず、快便促進食で効果を期待するには中等量以上の服用が必要のように思われました。

まだ、分析の途中ですので結論を述べる段階ではないかもしれませんが、この違いをみれば大腸がん検診を受けるときには、誰でもしっかり快便促進食を加えた精度の優れた[ネオ・メールチェック・大腸]<sup>®</sup>を受検しようと思われるのではないのでしょうか。

この大腸がん検診法のルーツは、本誌を発行し癌研究を支援されている(財)大阪癌研究会で

あり、ここに改めてこの歴史的な支援にお礼を申し上げます。もしもこの新しい大腸がん検診の受検を希望される際は、遠慮なく研究会事務局にお申し出くだされば便宜を図っていただけると信じています。

#### 文 献

- 1) 藤田昌英編著、よくわかる大腸がん検診ガイドブック。メディカ出版、大阪、1998
- 2) 藤田昌英：検診による大腸がんの早期発見—その現状、問題点と限界克服の試み—。癌と人、27号、10-12、2000
- 3) 阪本康夫：大腸がん検診の盲点—便秘が潜血検査の感度を下げる—。癌と人、27号、30-31、2000
- 4) 藤田昌英：知っておきたい便秘と大腸がんとの意外な関係。Camera Eye サンデー毎日、2000、8、13
- 5) 藤田昌英、阪本康夫：精度の向上をめざし、採便前に快便促進食を加えた新しい大腸がん検診の試み。日本消化器集検学会雑誌、41(3) 276-283、2003
- 6) 阪本康夫、藤田昌英：便潜血検査の精度向上をめざした、最便前・快便促進食の導入。消化器集団検診学会、2004、5、シンポジウム発表